英語基本動詞の教育教材開発論
－応用認知言語学からのアプローチ－

對　馬　康　博

１．はじめに[1]

昨今の中学校・高等学校での外国語・英語教育において、コミュニケーション重視の姿勢が打ち出され、それは新学習指導要領の中でも鮮明に表出されている。

(1) 外国語を通じて，言語や文化に対する理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，聞くこと，話すこと，読むこと，書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。
（平成20年３月、平成22年11月一部改正 中学校学習指導要領 第２章 第９節 外国語 第１款 目標）（平成21年３月 高等学校学習指導要領 第２章 第８節 外国語 第１款 目標）

こうした中等教育での流れを受けて高等教育機関としての多くの大学でもカリキュラム改革が急務であることは言うまでもない。

では、何をもってコミュニケーションの基礎というのか、定義することは難しいが、英語を聞き（Listening）、話し（Speaking）、読み（Reading）、書く（Writing）という４技能にとって、単語・イディオム等の語彙（lexicon）教育の導入はどの技能においても必要事項であるように思われる。中でも、いわゆる「基本動詞（basic verbs）」と「前置詞（prepositions）」の基本語（basic words）の運用は必須である。

そこで、試に最近の英語検定教科書をみてみると、非常に興味深い傾向があることが分かる。中学校用英語教科書の平成22年度版 *New Horizon English Course 2* では巻末資料として基本動詞 have と take の多義性がイラスト付きで紹介されている。さらに、高等学校用英語教科書の平成22年度版 *PRO-VISION ENGLISH COURSE I, II* では、基本動詞 give, keep, get, make, have, be の多義性が示されている。こうした検定教科書において、既に基本語の「多義性（polysemy)」が掲載されているということは、学校現場の中で指導の必要性が高まっているということを示唆している。さらに、*PRO-VISION ENGLISH COURSE* はコア・イメージに基づくイメージ図式を採用しており、これは学問的には「認知言語学（Cognitive Linguistics)」と呼ばれる分野の成果を応用したものである。このことは教科書著者の中に認知言語学者が含まれていることからも明らかである。[2] こうした検定教科書の中に認知言語学の成果が生かされているということは、認知言語学を英語教育に応用する有効性が公式に認められているということを暗示しているものであり、大変興味深い事実である。

また昨今の語学ブームのおかげで、認知言語学の成果を生かした NHK 教育テレビの番組が DVD 化されたり、書籍化されたりしていることに加えて、認知言語学に基づく様々な語学書が出版されていることからも、明らかに認知言語学を生かした応用言語学、すなわち、「応用認知言語学（Applied Cognitive Linguistics)」の必要性が垣間見られる。[3]

このように、認知言語学に基づく様々な有益な教材が世に出回り始めているものの、次の第２節で具体例を見るが、そうした書籍の中では各著者の分析の「結果」だけが提示されているに過ぎない面はいがめない。これは実際の学校現場の教師が生徒のレヴェルに合わせて教材をアレンジしようとする際、何を基準に、またどのような方法で分析すれば良いのか戸惑ってしまうという新たな問題を引き起こしてしまう。[4]

そこで小稿では、基本動詞で多義語の “break” を事例に取り上げ、認知言語学の枠組みから分析基準・方法を明確にして教育教材開発の方法論を論じ、学校現場での英語基本動詞の教育に一石を投じることを目標とするものである。

本論の構成は以下の通りである。次の第２節では先行研究として、田中茂範氏による一連の教育英文法「レキシカル・グラマー」としての「コア理論」の分析を概観し、教材としては非常に有用性が高いが、現場の教師がこの理論を使って自ら分析することは難しいことを指摘し、批判的に検討していく。第３節は認知言語学の道具立てを紹介し、英語教育への応用可能性を指摘する。第４節は認知言語学の道具立てを用いて、事例として “break” の分析例を示す。第５節は結論である。

２．レキシカル・グラマー理論（コア理論）の概要

2.1　コア理論の理論的背景

「レキシカル・グラマー」とは慶應義塾大学の田中茂範氏が中心となって開発する教育英文法のことであるが、中でも「コア理論 (core theory)」（田中 (編) (1987)、田中 (1990)、田中 (ほか) (2006)、佐藤・田中 (2009)）が有名である。また、田中氏が編者の一人である学習辞典の『Ｅゲイト英和辞典』は定評がある。この理論の主たる主張は以下の通りである。

(2) コア・理論の主張

A. 形が違えば意味も違う

B. 形が同じなら共通の意味がある

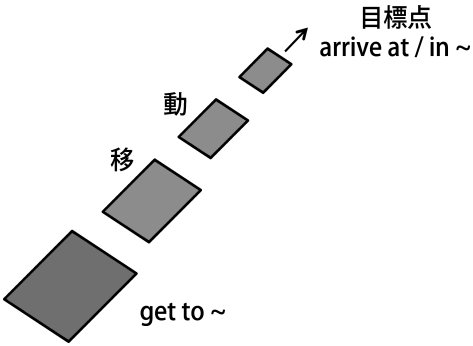
（田中（ほか）2006：10）

まず、(2A) の主張に従えば、「到着する」ということを含意する “arrive at” と “get to” でも、形（語彙）が異なっており、意味も違うということになる。次の例を見よう。

(3) a. How can I get to the station?

b. We will soon be arriving at/in the airport.

(田中・川出 2010: 25)



(著者により一部改変)(ibid.: 24)

図 1 : get toとarrive at / in の焦点化の違い

(3a) の get to は図 1 で示されているように起点側の視点に焦点が当たっているのに対して、(3b) の arrive at/in は目標点側の観点に焦点が当たっていることになり、それぞれ意味が異なるわけである。

次に (2B) の主張では、多義語においてでもそれぞれの用法は「コア (core)」という共通する意味で有機的につながっていることを示すことができることになる。ここで多義語 “miss” を例にみよう。

(4) miss のコア : <X が Y を捉え損なう>

a. I missed the target. (私は的をはずした。)

b. I missed the last train. (私は最終列車に乗り遅れた。)

c. I missed the ball. (私はボールを打ち／取り損ねた。)

d. I missed you. (あなたに会えなくてさみしかった。)

(ibid.: 26)

同じ miss という語が用いられている（4 a-d）の個別用法は、miss という同一の形式を持っているため、コアという共通する意味を持っているということになる。

では、「コア」というのはどのような概念なのであろうか？順を追って見ていこう。コア理論に従えばコアという概念は次のように定義される。

(5) a. コアとは、文脈に依存しないような動詞本来の意味のことを言う。

（佐藤・田中 2009: 13）

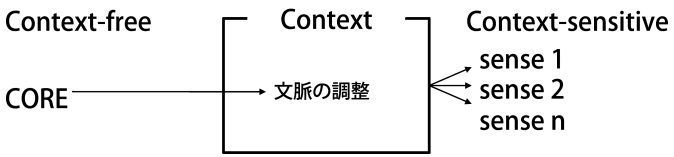
b. コアとは、語の中核的意味や機能を表したもの

（『Ｅゲイト英和辞典』: はしがき）

c. [⋯] “a single overarching meaning” を「コア（core meaning）」と呼ぶ。コアは、理屈上、文脈に依存しない―英語で言えば、“context-free” あるいは “context independent” な―意味を指す。

（田中（ほか）2006: 7）

この定義に従えば、コアに基づく多義語の意味決定のプロセスは以下のように描かれることになる。

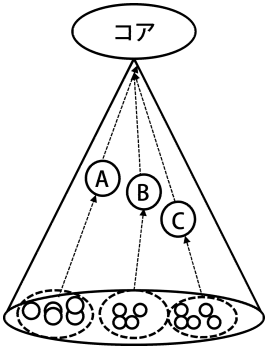


（田中（ほか）2006: 8）

図２：コアに基づく多義語の意味決定プロセス

この図式によれば、まず、コンテクストから独立した意味をコアとして想定している。次に、コアがコンテクストの中で用いられ（文脈の調整）、さらにコンテクストに依存した個々の意味へと拡張していくことになる。

さらに、この理論によれば、コアは円の中核のような存在を指示しているのではなく、次の図のように円錐の頂点に相当することになる。



(ibid.)

図３：コアの概念

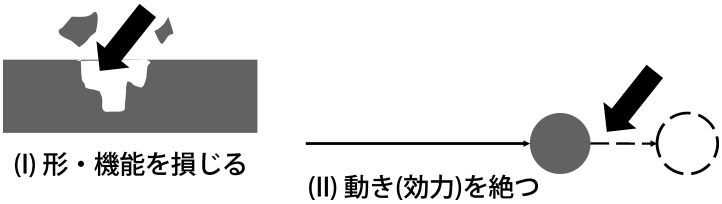
この図式では、コアは最大公約数的な意味であり、また、語の意味範囲の全体を表す概念であることが示されている。また円錐の底面の大きさは意味の範囲を示しており、それが大きければそれだけ個々の意味が増え、コアそのものの抽象度も増すということになる。図の A, B, C は個々の語義のいくつかをまとめあげた意味タイプを示しており、そこの共通性からコアを導いていくことになる。

2.2　コア理論に基づく事例分析―基本動詞 break の事例―

本節では前節で概観したコア理論を用いた基本動詞 “break” の事例分析を考察していく。まず、break のコアとその図式を見よう。

(6) コア：≪ x break y において、y に力を加え、y 本来のあり方（形・機能・動き［流れ］）を損じる≫

（田中（ほか）2006: 14）



（ibid.）

図４： break のコア図式

『Ｅゲイト英和辞典』では、break は上記のようなコアを持ち、次のような多義ネットワークを成していると考えられている。

（7）**break の多義ネットワーク**

I.（形・機能を）損じる

こわす，こわれる

折る，折れる

突破する

（突然）外に出す，外に出る

II.（連続している状態を）断つ

中断する

（約束・法律などを）破る

（習慣を）断つ

弱める，弱る

（一部改変）(『Ｅゲイト英和辞典』: 194，break 頁）

また、田中（ほか）(2006) は (7 II) のネットワークの内、動きの有無、すなわち動きの「焦点化」の有無を認め、これにより次のようなデータが振り分けられるとしている。

(8) [－動き]: {break a vase（花瓶を壊す），break one's neck（首を折る），break the window（窓を割る），break the loaves（パンをちぎる），break an egg（卵を割る），break prison（脱獄する），break one's heart（心を痛める），etc.}
[＋動き]: {break the wind（風を遮る），break one's journey（旅を途中でやめる），break an electric current（電流を切る），break the world record（世界記録を破る），break one's promise（約束を破る），etc.}

（田中（ほか）2006: 15）

さらに、田中（ほか）（ibid.）は break one's heart（人の気持ちを傷つける）の表現のように、物理的には壊すことができないような抽象的なものでも、break an egg のような具体概念を抽象概念にメタファー（metaphor）により投射することで適切に処理できるとしている。

2.3　コア理論の問題点

このようにコア理論はコア図式などからも分かるように、視覚効果などを伴い、一見すると学習者にとって大変有益であるように思われる。上記のコア理論における道具立ては少なくとも次のようにまとめられる。

(9) コア理論の道具立て
a. コアという中核的意味とその下位区分となるネットワーク
b. 焦点化
c. メタファー

こうした道具立てが用いられてコア理論が組み上げられているものの、本稿ではこの理論には少なくとも次の問題点があることを指摘する。第 1 に（9a）に関して、コアを抽出する際に 図 3 で示されるプロセスを経ることになるが、何を基準に語義をまとめたり（図 3 では A, B, C に相当）、そこからコアを抽出しているのか不明である。第 2 に（9b, c）の「焦点化」や「メタファー」とい

う概念が一般的な広い意味で曖昧に用いられており、どのような場合に適用されているのか明確ではない。また、この他にどのような道具立てがあるのか明確ではない。第３に多義語をネットワークとして表示する際、コアが中核的意味であることは分かるが、個々の用法同士の関係性が不明である。

以上の３つの問題点は英語教育においてより大きな問題を生むことになる。すなわち、現場の教師が自らの生徒に合うよう教材をカスタマイズする際、どのような道具立てを用いて、どのようなプロセスを経てコアを抽出し、そして、ネットワークを組むべきであるのか曖昧である。また個々の用法同士の関係が不明であるため、どの用法から、またどの順序で学習者に順序立て提示していくべきなのか全くもって曖昧かつ不明である。

以上のことを踏まえて、こうした問題点を解決するために、小稿では認知言語学の応用、すなわち「応用認知言語学（Applied Cognitive Linguistics）」の観点からアプローチしていく。

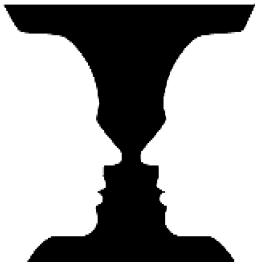
３．応用認知言語学における分析のツール
―認知文法と認知意味論の基本的道具立て―

3.1 「意味」とは何か？―概念化と捉え方―

本節では「応用認知言語学」における分析のツールとして「認知文法（Cognitive Grammar）」と「認知意味論（Cognitive Semantics）」の基本的道具立てを紹介していく。認知言語学（Cognitive Linguistics）では、人間の認識（cognition）と言語現象（linguistic phenomena）は決して切り離して記述することはできなく、むしろ、言語現象は認識現象によって動機づけられている（motivated）という態度を取る。その中でも特に Ronald W. Langacker（1987, 1990, 1991, 1999, 2008 など）が提唱する「認知文法（Cognitive Grammar）」は人間の認知の観点から文法の体系を記述しようという姿勢を取り、これまで多くの成果を挙げてきている。本節ではこのような自然な言語観に基づく理論の道具立てをみていくことになる。

さて、意味（meaning）とはどこに所在するのだろうか？すべての意味は我々の知覚できる物理的世界の中に存在し、ゆびで指すことで示すことができるのだろうか？認知文法では意味とは物理的世界の概念にあるのではなく、心の中で何かを思い描くという認知プロセス、つまり「概念化（conceptualization）」そのものの中にあると考えている。我々人間は人間に固有の認知能力（cognitive abilities）に基づき、同一の状況を概念化する際にも、どこに焦点を置き述べるのか（①「際立ち（prominence）」）や、どの程度詳しく述べるのか（②「詳述性（specificity）」）や、どのような位置から述べるのか（③「観点（perspective）」）というようなものの「捉え方（construal）」に依存して意味付けを行っている（cf. Langacker 2008）。

そこで、捉え方について順を追って見ていこう。まず「①際立ち」という概念であるが、我々の知覚経験というのは、焦点を当てて前景となる図（figure）と焦点からずれ背景となる地（ground）という要素からなっている。次の図を見てみよう。



（by E. Rubin）

図５：ルビンの杯

これは「ゲシュタルト心理学（Gestalt Psychology）」（cf. Koffka 1935, Kaniza 1979 など）で有名な図式であるが、黒と白のどちらを図と地で見るかによって２つの図式が見えてくる（図と地の反転現象）。１つは「杯」であり、もうひとつは「２人の顔」である。

図と地の反転現象はより専門的にはそれぞれ「プロファイル（profile）」と「ベース（base）」と呼ばれる。次の図を見てみよう。

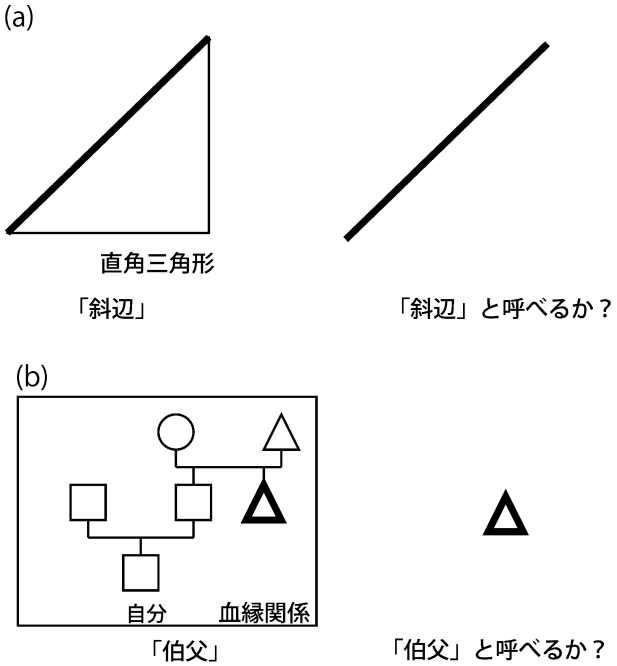
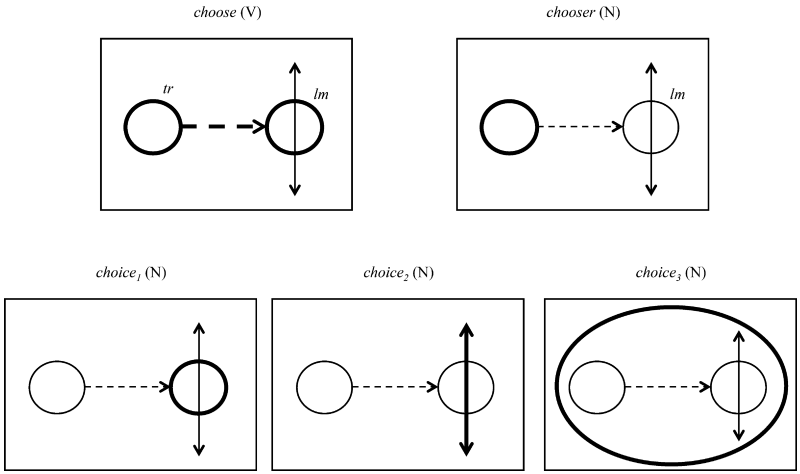


図６：プロファイルとベース

まず、直角三角形を思い浮かべてみよう。直角三角形の「斜辺」というとき、他の２辺がベースとなり、さらにその２辺の関係が90度で交差していることが前提となる。そしてその２辺を結ぶのが斜辺ということになる。そのようなベースが想起できない場合は、ただの斜めの直線としてしか認識されない。また、伯父というとき、そのベースには自分から見た血縁関係があるはずである。血縁関係というベースが想起できない場合、ただの生物学的な男性でしかない。

さらにプロファイルは最も際立つ「トラジェクター（trajector, tr）」と２番目に目立つ「ランドマーク（landmark, lm）」に分けられる。認知文法ではこうし

た区分により、品詞（part of speech）が定義される。例として動詞 choose、名詞 chooser と choice の関係を見てみよう。図 7 で示されているように、これらのベースは同一であるが、どこをプロファイルするのかによって品詞が異なる。



（Langacker 2008: 100）

図 7 ：動詞 choose・名詞 chooser と choice

まず、トラジェクターで主語になる「選択者」とランドマークで目的語になる「選択物」と破線矢印線で示されている「選ぶ」というプロセスがプロファイルされているのが動詞 choose である。さらに「選択者」だけがプロファイルされているのが名詞 chooser であり、ランドマークである「選択物」だけがプロファイルされるのが名詞 $choice_1$ である。また、双方向矢印線で示されている「選択の範囲」がプロファイルされているのが $choice_2$ であり、「選択すること」としての行為全体をモノ化（reification）してプロファイルされているのが派生名詞（derived nominal）の $choice_3$である。

さらにトラジェクター・ランドマークという概念は主語（subject）や直接目的語（direct object）という文法関係（grammatical relation）の定義付けにも採用

される。認知文法では、主語は最も際立つトラジェクター（tr）とされ、また直接目的語は２番目に目立つランドマーク（lm）と定義される。そして、典型的な出来事では、トラジェクターからランドマークへの力の働きかけ関係があると考えられている。ここで、「昨日ジョンがテーブルの上の花瓶を粉々に割ってしまった。」という出来事を想像してみよう。

（10）John broke the vase into pieces on the table yesterday.
tr　lm　location　setting

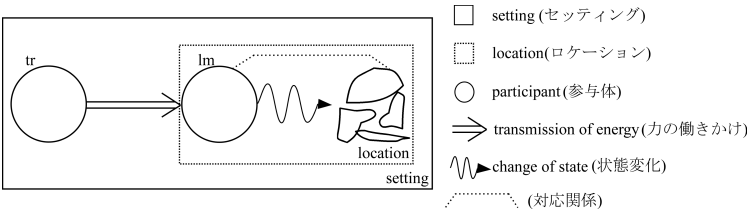
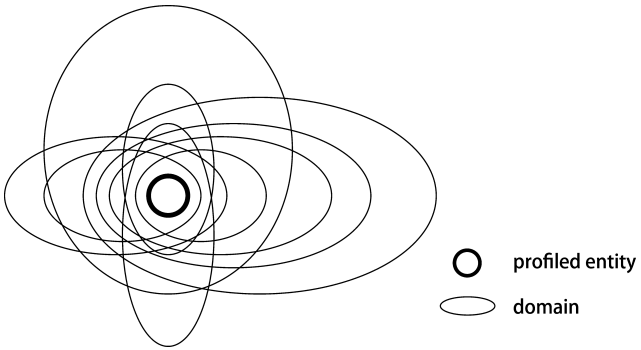


図８：動詞 break の典型的事態の認知構造

この様子は図８で示されている。認知文法では副詞で表される場所や時をセッティング（setting）やロケーション（location）というが、この図では昨日というセッティング上で、最も目立つトラジェクター（tr）で主語のジョンがテーブルというロケーション上にある２番目に際立つランドマーク（lm）で直接目的語の花瓶に力の働きかけを行い、花瓶が粉々に割れるという状態変化を遂げたという様子が適切に描かれている。このようにプロファイル（トラジェクター・ランドマーク）とベースという概念を用いれば様々な文法現象を捉えることができる。[5]

さらに際立ちに関する道具立てと相関するものとして、図９に示されているドメイン（cognitive domain（認知領域））という概念がある。ドメインとはプロファイルされる実体（entity）（モノ・コト）の意味を特徴づける際に関係する概念領域のことである。プロファイルされる実体（モノ・コト）には複数のド

メインが束のようになり関与している。そしてそのうち、意味に直接関係があるドメインに焦点が当てられてプロファイルされる実体の意味が確定されることになる。次の photograph と television の例を考えてみよう。



（Langacker 2008：48）

図９：ドメインとプロファイル

（11）a. The photograph is torn. [a material object]

b. The photograph is out of focus. [a visual image]

c. This is a photograph of me at age 10. [a representation of a person]

d. The photograph was awarded a prize. [the aesthetic value]

（12）a. Televisions need expert repairman. [an intricate piece of machinery]

b. Televisions look nice in family rooms. [the appearance of a television]

（下線は著者）（Taylor 2002：442-443）

同じ「写真」というモノを特徴付ける場合でも、（11a）の photograph は［物体］というドメインが焦点化されることにより、写真がモノとして扱われることになる。（11b）では、［視覚イメージ］というドメインが浮き立つことで写真のフォーカスの状態が描写されている。（11c）では［肖像］としていうドメインが際立つことで、被写体としての人が描かれている。最後に（11d）では、［芸

術的価値］というドメインが焦点になることで、その写真が賞の対象になることを意味している。また、(12)では同じテレビというモノを特徴付ける際にも複数のドメインが関与している。例えば、(12a) では［複雑な機械仕掛け］というドメインが喚起され、一方、(12b) では［外見］というドメインが浮き立つことで解釈されることになる。このように複数のドメインの束の中からどのドメインに注目して実体（モノ・コト）を特徴付けるのかによって、意味の相違という現象を適切に記述することができる。

次に「②詳述性」という概念を考察しよう。詳述性とは同じ実体（モノ・コト）をどの程度詳しく述べるのかという程度の問題である。次の例を見てみよう。

(13) a. thing → object → tool → hammer → claw hammer (Langacker 2008: 56)
b. hot → in the 90s → about 95 degrees → exactly 95.2 degrees (ibid.)
c. 物体 → 機械 → 家電 → パソコン → MacBook Pro Retina

(13a, b, c) はそれぞれ全て同じモノを指しているのだが、どのレヴェルで描写するのかによって、表現が異なることになる。そして、私達はその場の状況に応じて適切な表現を選択して使用している。例えば、(13c) に関わる状況では、「今日は何をするの？」という発話に対して、「パソコンを買いに行く。」という表現は自然でも「物体を買い行く。」という発話はいささか不自然である。私達はこのような詳述性に依存して言語活動を円滑に行っているのである。

最後に、「③観点」という概念を考えていこう。観点とは話者がどのような立ち位置から実体（モノ・コト）を捉えるのかということである。同じ状況でも異なる位置から捉えることによって意味が異なることは良くある。次の例を見よう。

(14) a. 高速道路が札幌から旭川まで走っている。
b. 高速道路が旭川から札幌まで走っている。

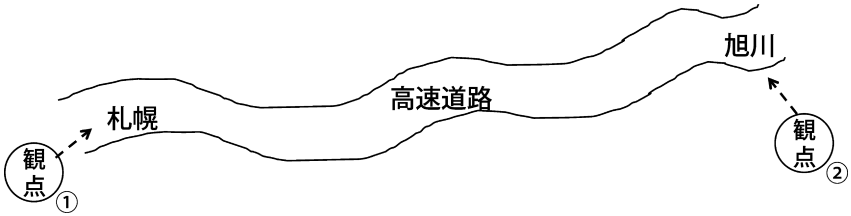


図10：観点による言語表現の違い

(14)ではそれぞれ「AからBまで」という表現が用いられているが、起点となるAをどちらの地点（観点）から捉えるかによって言語表現が異なる。おそらく、札幌近郊に生活の拠点を置いている人であれば、(14a) の方が親近感が湧くであろうし、その逆もまた言える。

もう一例として、 go と come の対立を考えてみよう。

(15) A: Aren't you ready to go yet? 「まだ行く用意が出来てないのか」
B: Keep your shirt on. I'm coming.（cf. I'm going.）「焦るなって。今行くよ」
(E-DIC[2])

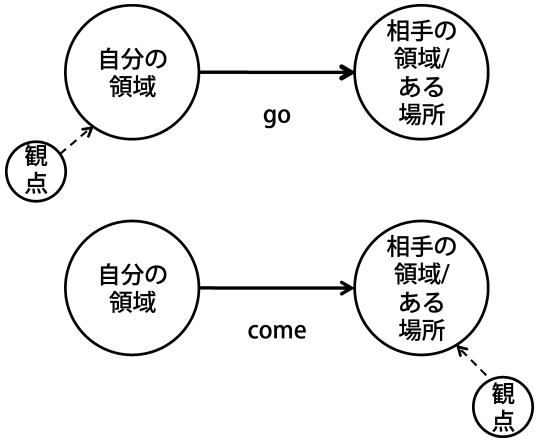


図11： go と come の違い

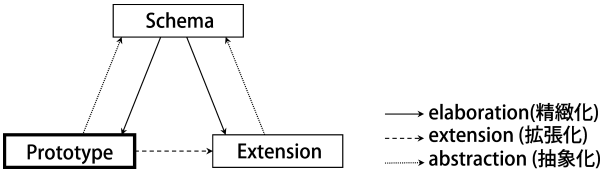
英語の go と come の対立は単純に日本語の「行く」と「来る」に対応しないことがあることは良く指摘される事実である。話し手と聞き手の間での対話で聞き手側に出向くことを伝達する際には “I’m going.” よりも “I’m coming.” の方が好まれる。これには図11のような観点が絡んでいるからである。go は自分に対して観点が当たっており、自分の領域から出て行く移動を意味するが、come は相手や着点に観点が当たっており、相手の領域や場所に出向いて行く移動を意図している。だからこそ come を用いた方が相手には丁寧に聞こえることになる。

以上のように、我々人間の認知能力に基づく「捉え方」という概念は私達が概念化によって言語活動を行う上で重要な道具立てである。[6] 本稿ではこうした認知文法の理論的道具立ては英語教育でも重要な役割を果たすと考える。従来の学校文法では、知識面としての文法や語法が重視され、それをどのような場面で運用すべきなのかという点は軽視される傾向が見受けられた。しかし、認知文法に基づく道具立てを用いれば、場面に応じて人間の認識に基づく道具をどのように活用して言語として表現していくのかということが英文法教育の主要な役割となる。つまり、知識としての文法ではなく、言語運用としてのオンライン文法が重要視されることとなるのである。本稿はこうした応用認知言語学の考え方は昨今のコミュニケーション重視の英語教育と相容れ合う概念であると考える。

3.2 「意味」をどのように処理しているのか？―カテゴリー化―

私達は日常生活の中で様々なモノや出来事に接して生活している。その中で、人間は個々のモノや出来事を比較し、共通点や相違点を見出し、ボトム・アップ式に一般化・抽象化していく認知能力を持っている。こうした帰納法的思考に基づいてカテゴリーにまとめあげていくことを「カテゴリー化（categorization）」という。こうしたカテゴリー化に基づいて、私達の知識は脳内で個別に点在して存在するのではなく、個々の知識はカテゴリーの中で、もしくは、カテゴリー間でネットワーク（network）を形成し、その中で認知処理を行っている。このような一連の体系を「使用依拠モデル（Usage-Based Model）」という。

認知文法では、私達は次のようなカテゴリー化処理を行っていると考えている。



（一部改変）（Langacker 1990: 272）

図12：カテゴリー化／ネットワークモデル

スキーマ（schema）とはカテゴリーの全ての事例に当てはまる抽象化した構造・知識のことであり、動的で拡張する柔軟性を持ち合わせている。また、プロトタイプ（prototype）とはカテゴリーの典型事例のことで、最も思い出しやすく、最も習得が早い。また、最も直観的で、最も使用頻度が高く、最も歴史的に古い用例である。さらに、拡張（extension）とはプロトタイプから何らかの点で逸脱・拡張した事例のことである。このように私達はプロトタイプと拡張事例という実際の言語使用の事例から共通点を抽象化（abstraction）し、スキーマを抽出することでカテゴリーを形成し、知識を脳内で認知処理している。

具体例として［ペット］というカテゴリーについて考えてみよう。

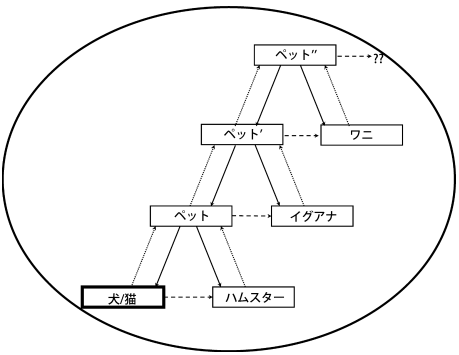


図13：ペットのカテゴリー

まず、ペットのカテゴリーで典型例としてのプロトタイプとして、「犬・猫」を挙げる人が多いだろう。［犬・猫］は「かわいらしい」・「小さい」・「なつく」・「しつけすればある程度人間の指示に従う」などの性質を持っている。そして、ハムスターをしつけることは少ないだろうが、他の３つの要素がハムスターに感じられれば、それがペットとして拡張していく。そして、プロトタイプとしての［犬・猫］と拡張例としての［ハムスター］に共通する「かわいらしい」・「小さい」・「なつく」などの共通する性質がスキーマの［ペット］として取り出される。ところが、イグアナのようなは虫類はなつかないだろうが、他の「かわいらしい」・「小さい」などの性質が見いだされれば、ペットとして拡張し、その性質が共通性として取り出され、［ペット’］というスキーマが取り出されうる。さらに、ワニは小さくないが、そこに「かわいらしい」という性質が見いだされれば、拡張し、「かわいらしい」ければペットだというようにスキーマとして［ペット’’］が取り出される。そして「かわいらしい」という性質が他の動物にも見いだされれば、さらに拡張する可能性を残している。[7] このように、私達が形成するカテゴリーというのは常に動的で拡張の幅を有していることになる。

カテゴリーの拡張には様々な要因が伴うが、中でも認知意味論が扱う比喩によるものが多く、比喩には類似性に基づく「メタファー（metaphor）（隠喩）」と近接性に基づく「メトニミー（metonymy）（換喩）」というものがある。例えば、「月見うどん」とは卵黄の眺め（抽象）が月見（具体）と類似することを例えており、これはメタファーに当たる。他方、「きつねうどん」とは狐の好物が油揚げであり、これと狐との近接関係を例えていることから、メトニミーに当たる。つまり、メタファーとは抽象物が類似する具体物に見立てられて理解されることであるのに対して、メトニミーとは近接性から指し示されている実体（モノ・コト）と実際に意図している実体の乖離から生じるものである。

カテゴリー化を比喩の観点から再度考えるために、具体例として “circle” という例を見よう（cf. 谷口 2006）。

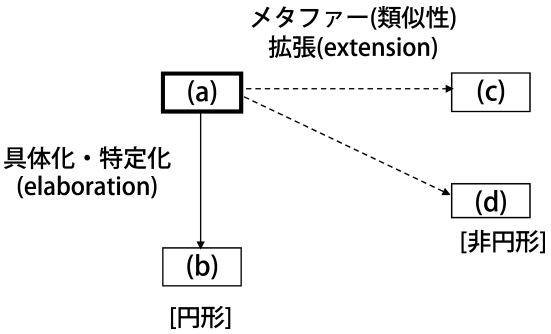
(16) a. 円

b. 円形のもの、円形広場、環状道路、環状線

c. 仲間、社会

d. 周期、循環

（谷口 2006：43）



（一部改変）(ibid.：45)

図14： circle のネットワーク

circle の用法は(16)のように挙げられる。このカテゴリーの典型例としてのプロトタイプは (16a) である。(16b)はそれを具体化・特定化したものである。認知文法ではこの関係を「精緻化(elaboration)」と呼ぶ。(16c) の仲間や社会というやや抽象的概念は円という具体的概念で捉えられるものであり、これはプロトタイプからのメタファーによる拡張と考えられる。さらに、(16d) の周期や循環というのは非円形であるが、その抽象概念そのものが円という具体的概念から捉えられるため、これもプロトタイプからのメタファーによる拡張と考えられる。このように比喩は従来の研究では言葉の彩としてレットリックの問題として片付けられてきたが、認知意味論では日常生活の至るところで比喩が反映され、我々の認知処理を手助けしていると考えている（cf. Lakoff and Johnson 1980)。[8]

このように、我々は意味というものをカテゴリー化により処理し、ネットワークとして脳内に蓄積し、言語活動を円滑に行っているわけである。従って、英語教育においても、生徒に文法・語彙の用法を個別に暗記させるのではなく、ネットワークとして提示し記憶・運用させる指導が求められているといえる。

3.3　応用認知言語学対コア理論

2.3節で議論したように、コア理論にはいくつかの問題点が存在する。第1にコアの抽出プロセスは何を基準にしているのか不明であった。それに対して応用認知言語学モデルでは、3.2節でみたカテゴリー化に関して、プロトタイプ・拡張・スキーマ・メタファー・メトニミーという明確な道具立てと基準がある。第2にコア理論では道具立ての定義が曖昧であったが、応用認知言語学モデルでは、人間の認知能力が反映され動機づけられ（motivated）ている「捉え方」を基にした明確な道具立てがある。第3にコア理論では多義語をネットワークとして表示する際、コアが中核的意味であることは分かるが、個々の用法同士の関係性が不明であった。一方、応用認知言語学モデルでは、個々の用法同士はカテゴリー化に基づくネットワークの接点として結ばれており、その関係性（精緻化・拡張）も明示化することができている。

以上のように、応用認知言語学モデルはコア理論での問題点を克服可能であり、このような明確な基準に基づいて分析したものは、分析のプロセスが明確であり、現場の教師にもはっきりと分かるはずである。そして何よりも教師が自らの生徒用に教材をカスタマイズする際に明確な道具立てと基準に基づいて分析すれば、学習者のレヴェルに応じた用法・教材を提示していくが可能となり、何よりも英語学習に有効であると考える。このように応用認知言語学に基づく文法モデルは昨今のコミュニケーション重視の英語教育には有効な手段となるはずである。そこで本稿の以下の節では応用認知言語学モデルに基づいて基本動詞 “break” の分析事例を示すとともに、考えられる教授に関して議論していく。

4．応用認知言語学に基づく基本動詞 break の事例分析

4.1　基本動詞 break の用法とカテゴリー化

本節では、第３節で紹介した応用認知言語学モデルの道具立てを用いることによって、事例として基本動詞 “break” の用法とカテゴリー化について考察していく。なお、break には自動詞用法もあるが、今回は示唆するにとどめ、他動詞用法に限定することにする。

まず、英英辞書で第１義として挙げられている定義を確認しよう。

(17) a. To sever into distinct parts by sudden application of force, to part by violence. (OED[2])

b. When an object breaks or when you break it, it suddenly separates into two or more pieces, often because it has been hit or dropped. (COBILD[5])

c. to (cause something to) separate suddenly or violently into two or more pieces, or to (cause something to) stop working by being damaged (CALD[3])

d. if you break something, you make it separate into two or more pieces, for example by hitting it, dropping it, or bending it (LDOCE[5])

e. to be damaged and separated into two or more parts, as a result of force; to damage sth in this way (OALD[8])

f. to make something separate into two or more pieces, for example by hitting or dropping it (MED[2])

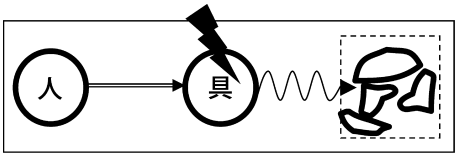
各辞書の意義に共通していることは、何らかの力が働く結果、あるモノが２つもしくはそれ以上の部品に別れたり、バラバラになるということである。また、小西(編)(1980)『英語基本動詞辞典』においても以下の通り、同様の趣旨が指摘されている。

(18) 中核的意味は「突然の力を加える（力が加わること）によってばらばらにする［なる］」ということである。

（小西 1980：159, break 頁）

また、OED によれば、この用法が歴史的に一番古いということである。ここでこれらの定義を基に、break の典型例としてのプロトタイプを考えよう。ここで定義されているように、モノを壊すという状況において、典型的には人（(17b, d) では you と表記）の力によって具体物（(17b) では object と表記、また (17c, d, e, f) では something と表記、(17a) では distinct parts と表記)）を壊すという状況が想定される。そこで break のプロトタイプを (19) のように想定しよう。[9]

(19) **break のプロトタイプ：「人が具体物に力を加えて形（・機能）を壊す」**
中心となるドメイン：トラジェクター：「能力」；ランドマーク：「形」（・「機能」）



○: 人・具体物・抽象物
⇒:「壊す」という力
:「破壊・亀裂」
:「安定した状態が壊れる」という状態変化

図15： break のプロトタイプ

(20) a. John broke the window.（ジョンが窓を割った。）
b. Mary broke the dish when she was washing it.
（メアリーは皿を洗っている時に割ってしまった。）

c. He broke his leg while playing soccer.
（彼はサッカーをしていて足の骨を折った。）

d. Don't get sore. I didn't mean to break the dish.
（怒らないでよ。わざとお皿を割ったわけじゃないんだよ。）

e. Mr. Smith fell down and broke his neck.
（スミス氏は転んで首の骨を折った。）

f. I'm sorry I broke your vase. Would perhaps $100 make amends?
（あなたの花びんを割ってしまってすみません。100ドルぐらいで弁償させてもらえませんか？）

g. I broke this computer down for its parts.
（部品を手に入れようと，このコンピューターを分解した。）

h. The children broke the biscuit into three pieces.
（子供たちはビスケットを３つに割った。）

i. I had to break a window to get into the house.
（家に入るために窓を割らなければならなかった。）

j. Charles is always breaking things.
（チャールズは物を壊してばかりいる。）

（c-g: E-DIC[2]; i: LDOCE[5]; j: CALD[3]）

このプロトタイプは(20)のような典型的な状況を表した文のイメージを的確に捉えている。プロトタイプを描いている図15の認知図式では、「際立ち」という捉え方が主に関わっている。つまり、場面の中で最も目立つ存在は主語となるトラジェクター（tr）の人であり、２番目に際立っているのは力が加えられる直接目的語となるランドマーク（lm）の具体物である。そして、ランドマークが粉砕されたり、いくつかの部品に分けられるという状態変化をする様子が描かれている。また、ドメインとの関係を述べれば、プロトタイプでは人が具体物に力を加え分離させるという行為を行うことができるという具合に、トラジェクターである人の動作主性を反映する「能力性（ability）」のドメインが浮

き立っていることになる。ただし、(20a-f) ではトラジェクターが非意図的に力を加えているのに対して、(20g-i) は意図的であるという違いがある。また、(20j) は意図的とも非意図的とでも解釈可能である。[10] さらに、ランドーマークは「形 (shape)」のドメインが主に関与しているが、形が崩れることで「機能 (function)」も失われることもあるため、機能のドメインが関与することもあり得る。[11]

第２の拡張として、モノを壊すという状況において、典型的にはトラジェクターは人であろうが、人が使う道具としての具体物が具体物を壊すという状況も考えられる。このケースでは、プロトタイプからのメタファーによる拡張が生じており、「擬人化 (personification)」が働いていると考えられる。例えば、(21a) ではハンマーが窓を壊すという状況では、ハンマーには壊せるという「属性 (property)」が見いだされるために擬人化して捉えられている。また (21b) も皿洗い機には皿を自動的に洗えるという属性が見いだされるため、擬人化されて解釈されるものである。従って、擬人化により幾分かの動作主性が捉えられることになる。

(21) a. The hammer broke the window.　（ハンマーで窓を割った。）
　　b. The dishwasher broke the dish accidently.
　　（皿洗い機は誤って皿を割ってしまった。）

故にこの用法はプロトタイプからの拡張例として次のように捉えられるものである。

(22) **拡張例［a］：プロトタイプからのメタファーによる拡張（tr の擬人化）**
「具体物が具体物に力を加え形（もしくは機能）を壊す」
中心となるドメイン：トラジェクター：「属性」；ランドマーク：「形」
（・「機能」）

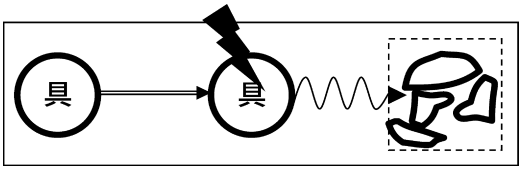


図16： break の拡張例[a]

プロトタイプではトラジェクターである人の「能力性」のドメインが浮き立っていたのに対して、この拡張例ではメタファーによる擬人化に伴い、トラジェクターである道具の「属性 (property)」のドメインへシフトが起こっているため、このような解釈が可能となるわけである。

第３に、この拡張例 [a] からさらに拡張の方向性が見いだされる。具体的には、[a] のトラジェクターの具体物がメタファーにより抽象化されて、その抽象物がランドマークの具体物に力を加え壊し分離させるという状況が考えられる。これが (23) の例である。

(23) The accident broke her leg.（事故で彼女は足を折った。）

またこの拡張の様子は (24) のように示され、その認知図式は図17に描かれている。この場合、拡張例 [a] の「属性 (property)」のドメインから「原因 (cause)」のドメインへとシフトが起こっているといえる。

(24) **拡張例 [b]：拡張例 [a] からのメタファーによる拡張（ tr の具体物→抽象物）**

「抽象物が具体物に力を加え形（もしくは機能）を壊す」

中心となるドメイン：トラジェクター：「原因」；ランドマーク：「形」（・「機能」）

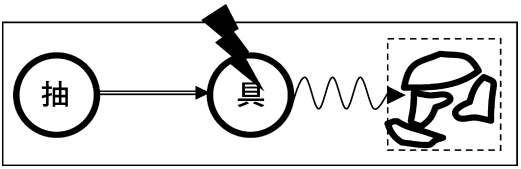


図17： break の拡張例［b］

さらに、この拡張例［b］から拡張の方向性が見いだされる。ランドマークの具体物がメタファーにより抽象化されて、トラジェクターの抽象物がランドマークの抽象物に力を加え壊し分離させるという状況が考えられる。これが(25)の例である。

(25) a. A lack of union funds broke the back of the strike.
（組合の資金不足のため，ストは失敗に終わった。）
b. The boss's voice broke the spell.　（部長の声で現実に引き戻された。）
c. His joke broke the tension.　（彼の冗談で皆の緊張がほぐれた。）
（E-DIC[2]）

こうした拡張は (26) に示され、その認知図式は図18に示される。また、拡張例［b］ではランドマークが具体物であり、そして力を受け取る存在として具体的な力の受け手としてそれ自体が状態変化しうる存在としての「形 (shape)」（もしくは「機能 (function)」）のドメインが浮き立っていたのに対して、拡張例［c］は抽象的な力の受け手として物体性を失った抽象物 (abstract thing) の「価値 (value)」・「機能 (function)」のドメインへとシフトが起こっているといえる。

(26) **拡張例［c］：拡張例［b］からのメタファーによる拡張（ lm の具体物→抽象物）**
「抽象物が抽象物に力を加え価値もしくは機能を損なわせる」

中心となるドメイン：トラジェクター：「原因」；ランドマーク：「価値」•「機能」

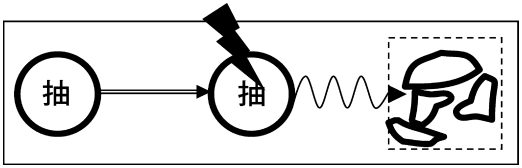


図18： breakの拡張例［c］

またこうした用法から、さらなる拡張が見られる。トラジェクターは抽象物のままであるが、ランドマークが抽象物から人の内面という抽象物へとメタファーにより変化する。(27) の例では、ランドマークは表面的には人を指し示しているが、ふつう人を壊すことはできない。そのため、この例では人間を抽象物に見立てるという、擬人化と逆の非人間化「(dehumanization)」というメタファーが関与している。だからこそ、人間にも壊すという break の表現が用いられるわけである。

(27) a. The death of his wife broke him completely.
（妻が死んだせいで彼はすっかり気が滅入ってしまった。）
b. The scandal broke him.
（スキャンダルのせいで彼はだめになってしまった。）
c. Losing his business nearly broke him.
（仕事を失ったせいで彼はほとんどだめになりそうだった。）
(a, b: OALD[8]; c: LDOCE[5])

この拡張は (28) に示され、さらにその認知図式は 図19 に描かれている。拡張例［c］ではランドマークである抽象物の「価値 (value)」•「機能 (function)」ドメインが浮き立っていたが、拡張例［d］では人間の「感情 (emotion)」という

ドメインへシフトし、際立つことになる。

(28) **拡張例[d]：拡張例[c]からメタファーによる拡張（lm の抽象物→人間）**
「抽象物が人間に力を加え感情を損なわせる」
中心となるドメイン：トラジェクター：「原因」；ランドマーク：「感情」

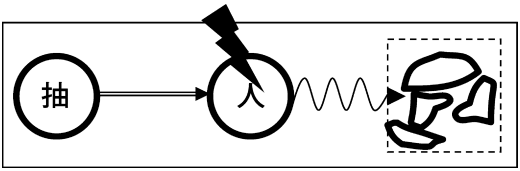


図19： break の拡張例［d］

さらにこの用法から拡張が見られる。拡張例［d］では人そのものが抽象物に見立てられるという非人間化のメタファーが関与していたが、(29) に示されるように、さらにメトニミーにより人の内部の機能、つまり感情等そのものがランドマークとなり、それが損なわれるということがある。このメトニミーによる拡張では、人間の「感情」というドメインが変わらず浮き立っていることになる。従って、この場合は拡張例［c］とはほとんど意味が変わらない。

(29) a. The slightest sound would break his concentration.
（わずかな音でもすれば、彼の集中力は途切れてしまう。）
b. It broke my heart.　（そのせいで私の心が折れた。）
c. The sad news broke his heart.
（その悲しいニュースのせいで彼の心が萎えた。）
（a：LDOCE[5]，b：Wordbank）

(30) 拡張例［e］：拡張例［d］からメトニミーによる拡張（lm の人間→人間の内面）

「抽象物が人間の内面に力を加え感情を損なわせる」

中心となるドメイン：トラジェクター：「原因」；ランドマーク：「感情」

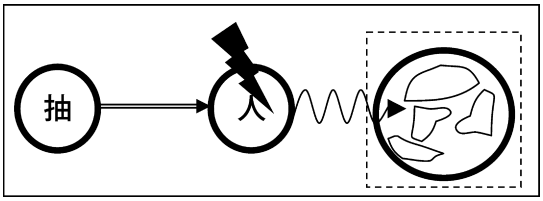


図20：breakの拡張例［e］

ここでプロトタイプからの拡張に戻ろう。拡張例［a］ではトラジェクターが人から具体物への擬人化というメタファーにより拡張していたが、次に見るタイプではトラジェクターは人のままであり、ランドマークの具体物が抽象物へとメタファーにより拡張する例である。(31a, b) のランドマークは「毎日」、「20ドル」であり、物理的に分離させることはできない（ただし、(31b) は紙幣をいくつかの紙切れにすることは可能であるが)。むしろ、その機能・価値を分離したり損なわせるタイプである。

(31) a. We break each day into three work shifts.
（うちの会社では毎日を３つの勤務時間帯に分けている。）
b. Can you break a twenty-dollar bill?
(20ドル札を細かいのにくずせる？)

(E-DIC[2])

この拡張は(32)に示され、その認知図式は図21のように描かれる。この場合、トラジェタクターはプロトタイプと同じ「能力性」のドメインが浮き立ってい

るが、ランドマークである抽象物は、プロトタイプの物体の「形」（・「機能」）のドメインから抽象物の「価値」・「機能」のドメインへとシフトが起こっている。

(32) **拡張例［f］：プロトタイプからのメタファーによる拡張（lm の具体物→抽象物）**

「人が抽象物に力を加え価値や機能を分離したり損なわせる」

中心となるドメイン：トラジェクター：「能力」；ランドマーク：「価値」・「機能」

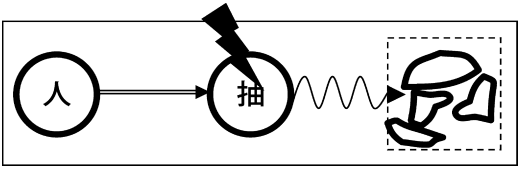


図21： break の拡張例［f］

さらに、プロトタイプからの拡張例として、ランドマークの具体物がメトニミーによりその内容物へと拡張する事例がある。(33)の例では具体物が物理的に分離するというよりも、その中の形（・機能）を分離させる、すなわち、内部の形（・機能）を壊すというメトニミーによる意味が得られる。

(33) a. My brother broke my PC.　（兄が私の PC を壊した。）

b. The DVD player is broken again. （DVD プレーヤーがまた壊れた。）

この拡張は(34)に示される。また認知図式は図22のように示されるが、メトニミーによる容器と内容物の関係を表すために、図の右端が円（容器）と部品（内容物）から成っていることが示されている。このメトニミーによる拡張では、ランドマークのドメインは物体の中の「形」(・「機能」）のドメインが喚起され、

具体物の意味付けが行われることになる。[12] ただし、この拡張ははっきりと分離できるわけではない。プロトタイプの（20c）では “his leg” を折ったことになっているが、日本語訳の通り、実際に折ったのは足の内部の骨である。これも一種のメトニミーと考えられなくもない。従って、プロトタイプから拡張例［g］への拡張は我々の解釈による度合いの問題である。

（34）**拡張例［g］：プロトタイプからのメトニミーによる拡張（lm の容器と中身の関係）**
「人が具体物に力を加え、その内部の形（・機能）を壊し損なわせる」
中心となるドメイン：トラジェクター：「能力」；ランドマーク：「形」（・「機能」）

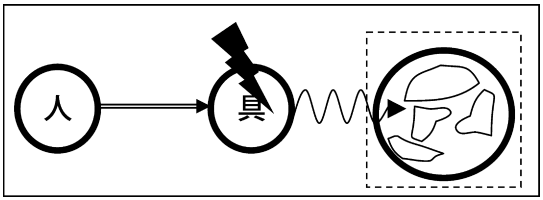


図22： break の拡張例［g］

さらに、拡張例［g］からの拡張として、ランドマークの具体物がメタファーにより抽象物へと拡張し、これによりその抽象物の内部の価値・機能が損なわれるという事例がある。こうした事例は学校現場ではイディオムとして例外的に提示されることもあるであろうが、カテゴリー化の観点からすれば、break の用法の一部として取り扱う方が自然である。

(35) a. Before you decide to break the law, just remember, there's no peace for the wicked.
(法を犯そうと決める前に，悪人に平安なしということばを思い出してほしい。)

b. If you play dirty with us, we'll sue you to break the contract.
(私たちに対して卑劣なまねをするなら，契約違反の訴えを起こしますよ。)

c. Since you won't take a hint, I'll lay it on the line (for you). I want to break our engagement.
(察していただけないようですから、はっきり申しあげます。私たちの婚約を解消したいのです。)

d. break the peace　(平和を乱す)

e. break one's journey　(途中下車する)

f. Mary found it hard to break the cigarette habit.
(喫煙の習慣をやめるのは難しいことを知った。)

(E-DIC[2])

この拡張は (36) に示され、認知図式は図23のように示すことができる。この場合は拡張例 [g] のランドマークの物体の中の「形」(・機能) のドメインから抽象物の中の「価値」・「機能」のドメインへとシフトが起こっている。

(36) **拡張例 [h]：拡張例 [g] からのメタファーによる拡張（lm の具体物→抽象物）**
「人が抽象物に力を加え、その内部の価値・機能を壊し損なわせる」
中心となるドメイン：トラジェクター：「能力」；ランドマーク：「価値」・「機能」

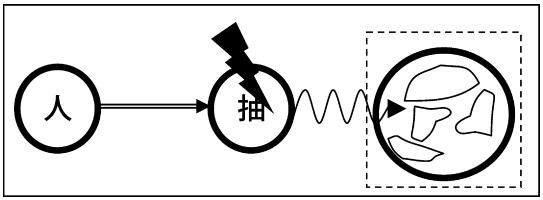


図23：break の拡張例［h］

ここで、拡張例［f］へ戻ろう。ここから違う方向への拡張が見られる。トラジェクターは人のままであるが、ランドマークが抽象物から人の内面という抽象物へとメタファーにより変化する。この例は、拡張例［d］と同様に人間を抽象物に見立てるという、擬人化と逆の「非人間化（dehumanization）」というメタファーが関与している。さらに、メトニミーにより人の内部の機能、すなわち感情等がランドマークとなり、それが損なわれるということになる。

(37) a. Don't tell Jane that you saw her boy friend out with another girl. It'll break her heart.
（ジェーンに、彼女のボーイフレンドがほかの女の子と一緒にいるところを見たなんて言うんじゃないよ。ひどく悲しむから。）
b. Don't break your concentration.（注意を集中し続けなさい。）
c. They tried to break his will [...] but he resisted.
（彼らは彼の意志をくじこうとしたが、彼は抵抗した。）
（a, b：E-DIC[2]；c：CALD[3]）

この拡張の様子は(38)に示され、その認知図式は図24に図示される。この拡張では、拡張例［f］のランドマークの抽象物の「価値」・「機能」のドメインから人間の「感情」というドメインへとドメインがシフトし浮き立つことになる。[13]

(38) 拡張例［i］：拡張例［f］からのメタファーとメトニミーによる拡張（lm の具体物→人間の内面）

「人が人の内面に力を加え感情を損なわせる」

中心となるドメイン：トラジェクター：「能力」；ランドマーク：「感情」

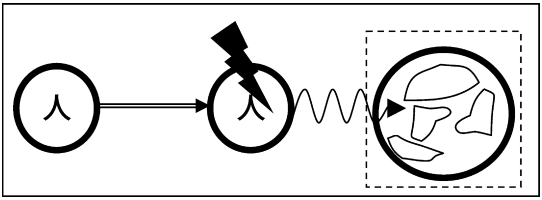


図24：break の拡張例［i］

最後に break の自動詞用法への拡張を示唆しておく。自動詞用法は他動詞用法のプロトタイプからのメトニミーによる拡張として捉えていくことができる。プロトタイプはトラジェクターの人がランドマークの具体物に力を加えて形（・機能）を壊すということを意図するものであるが、自動詞用法では、このうち、人と力の働きかけ部分がプロファイルされていなく（故にベースである）、具体物と壊れるという状態変化のみがプロファイルされている。この様子は図25に示されている。ここでの捉え方の認知プロセスには「際立ち」という「図と地の反転現象」と平行して「観点」が関わっている。つまり、この図式では、プロファイルされていない人と力の働きかけ部分は点線で示され（図と地の反転現象）、具体物がトラジェクターとして主語に昇格し（人から具体物への観点の転換現象）、状態変化を遂げることになる様子が描かれている。従って、プロトタイプと自動詞用法の関係は「全体と部分」の関係によるメトニミーによる拡張として捉えられる（もちろん、この他の自動詞用法はさらに考察する必要性があり、ここでは他動詞用法から自動詞用法への拡張の方向性を示唆するに止めておく）。

(39) a. The cup broke into pieces.　（カップが粉々に壊れた。）

b. The dam has broken!　（ダムが決壊した！）

(40) **break の自動詞用法への拡張：**

プロトタイプからのメトニミーによる拡張(全体と部分の関係)

「具体物の形（・機能）が壊れる」

中心となるドメイン：トラジェクター：「形」（・「機能」）

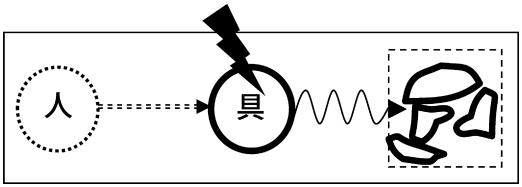
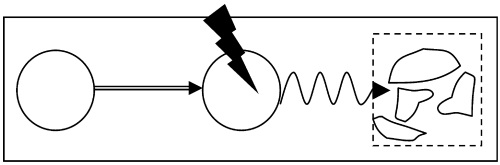


図25：break の自動詞用法への拡張

以上の用例からボットム・アップ式に全てのメンバーに共通する抽象的な break のスキーマを抽出してみよう。全てに共通していることは「あるモノ（人・具体物・抽象物に関わらず）が別のモノ（人・具体物・抽象物に関わらず）に力を加えて安定した状態を壊す」ということである。よって本稿では、基本動詞 break のスキーマを以下の様に抽出する。

(41) **break のスキーマ：**

「ある実体（人・物・抽象物）が別の実体（人・物・抽象物）に力を加えて安定した状態を壊す」



○: 人・具体物・抽象物
⇒:「壊す」という力
:「破壊・亀裂」
:「安定した状態が壊れる」という状態変化

図26：break のスキーマ

この場合、際立ち関係のプロファイル、ドメイン、観点は抽象化されているため、表示されていない。換言すれば、個々の用法はこうした要因によって拡張していくことになる。

また、ここで break に直接関与しているドメインをまとめておくこう。Langacker (1987, 2008)が言うように、認知ドメインというのは「空間」や「時間」という基本ドメイン (basic domain) から、「形」・「機能」・「原因」といった非基本ドメイン (nonbasic domain) まで階層を成しており、ドメイン自体は無限 (open-ended) に存在するのだが、上記で確認したように、break のトラジェクターとランドマークに直接関わるドメインはある程度決まっている。[14] トラジェクターに関しては 図27 で示されている通り、少なくとも「能力」・「属性」・「原因」のドメインが関与している。また、ランドマークに関しては図28 で示されているように、少なくとも「形」・「機能」・「価値」・「感情」のドメインが想定される。そしてトラジェクターとランドマークのドメインの組み合わせが、スキーマから個々の用法へ精緻化（具体化)、そして拡張する動機付けの一要因となっている。

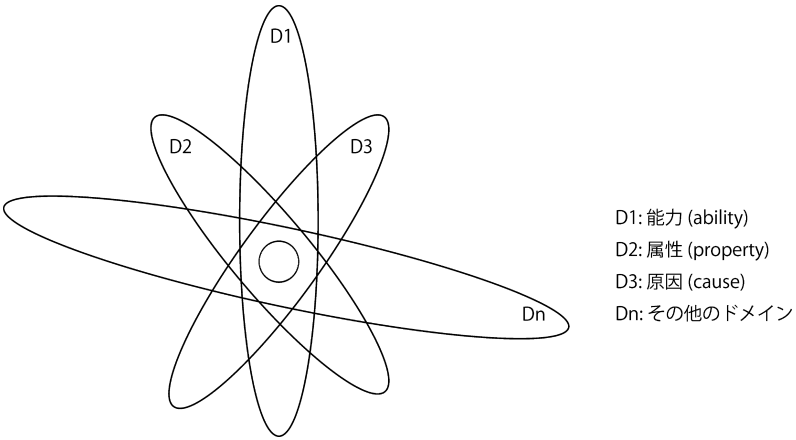


図27：break のトラジェクターに関わるドメイン

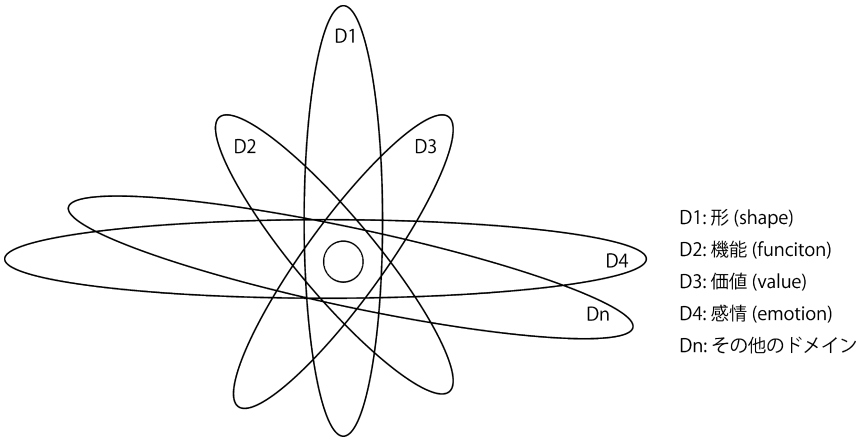


図28：break のランドマークに関わるドメイン

なお、上記の break の事例分析には詳述性（specificity）の概念が感じられないように思われるが、break の分析の場合には個々の用法の拡張の背後で関与している。例えば、拡張例［d］と［e］の用法とし(42)の例が挙げられる。この例では him は人そのものを指しているのではなく、him と言語化していても、

やはりメトニミー的に傷つくのは彼の心（his heart）である。これは日本語表現でいう「やかんが沸いた」と「お湯が沸いた」（本来沸くはずのものは「水」なのだが）という対立と同じであり、同一の指示物を指しているのであるが、どの程度詳しく述べるのかということは実際のコミュニケーションのオンラインの場での処理過程で語用論的（pragmatic）に決定されることになる。

（42）The sad news broke {him / his heart}.

このように基本動詞 break はスキーマ・プロトタイプ・拡張例から成ることで、ひとつのカテゴリーを形成している。そしてその拡張には我々の捉え方という認知プロセスが色濃く反映されているわけである。

4.2　基本動詞 break のネットワークと教授

前節では基本動詞 break のカテゴリー化の事例分析を行ったが、この節ではその分析結果に基づいてネットワークを示すと共に、その教授について考えていく。

基本動詞 break のネットワークから見ていこう。まず、典型例となるプロトタイプがあり、これが中心義となる。そしてそこからメタファーやメトニミーという基準により個々の用法が拡張していく。さらに、プロトタイプと全拡張事例に共通する抽象的な意味としてのスキーマがボトム・アップ式に抽出される。このネットワークの様子は 図29 に示されている。[15]

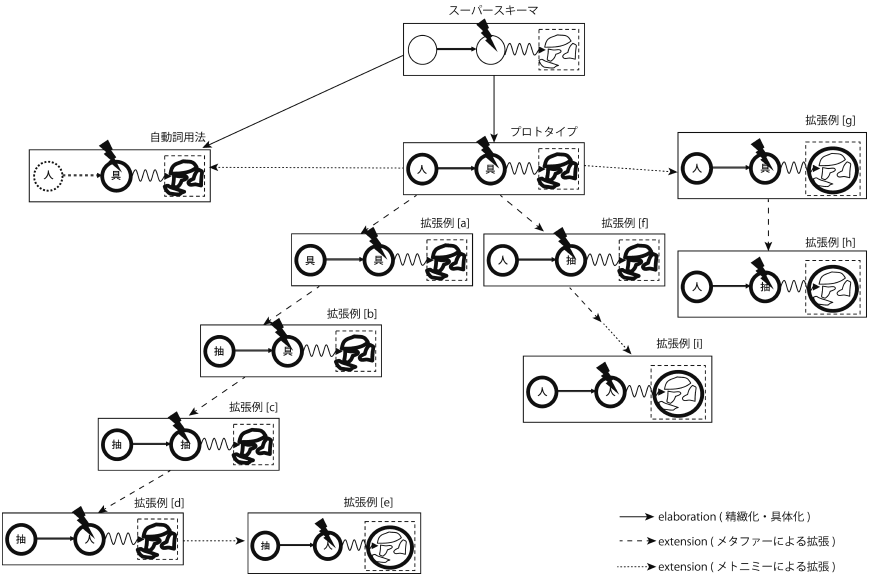


図29：break のネットワーク

コア理論では、個々の用法、意味のまとまりとなる語義、最大公約数的なコアが漠然と示されていたのだが、上記のネットワークは個々の用法がネットワーク接点と成っており、その接点同士の拡張関係が明確に示されており、全くもって別物である。そしてこのモデルでは分析の基準・道具立てがはっきりとしており、故に反証可能であり、分析結果だけを示したコア理論とは明らかに異なる。

本稿ではこの事実が英語教育における教授に影響を及ぼすと考える。本稿が依る応用認知言語学モデルに基づけば、学校現場の教師自身が道具立てを用いて分析することが可能となる。また、その分析により、教師は自身の生徒のレヴェルに応じて、どの用法をどの段階で教授するのかということを明確にシラバスに取り込むことができる。例えば、あくまでも著者の私見ではあるが、プロトタイプから左下に拡張していく [a]-[e] や右下の [h] や [i] の例はトラジェクターやランドマークの抽象度が高く、比較的学習がすすんだ生徒・学生に

導入すべきであると考える。一方、プロトタイプから右方向へと拡張していく方向の［f］,［g］の事例はその順序の通りに、比較的早い段階から導入できると考える。理由は、学習者自らが体験できるような人をトラジェクターとして主語に取る用法は具体性が高いからである。逆に、学習者自身が関与するというよりも、舞台上の外からあたかも眺めているような構図となる具体物や抽象物がトラジェクターやランドマークとなる用法、それに加えて人が非人間化されるというメタファーを伴う事例は抽象度が高いため、比較的高度な抽象的思考が発達した学習者の方が理解しやすと考えるからである。

このように、明確な基準と道具立てに基づく応用認知言語学の視点は教授する側の教師と学習者の双方に大きな利点をもたらすと考えられる。言語はすぐれて人間の認知を反映しており、認識作用と言語現象を切り離して考えることはできない。本稿で用いた人間の認知に基づく基準・道具立てによる分析はまさにこの点を的確に反映しているわけである。

5．結　語

小稿では、昨今流行となっているコア理論には有益な点も多いが、問題点もあることを指摘した。その上で、応用認知言語学に基づく道具立て・基準と具体事例を示すことで、その有効性を明らかにした。さらに、その道具立て・基準に基づき、基本動詞で多義語の “break” の用法を分析し、ネットワークを示した。最後に応用認知言語学がもたらす教授を示唆した。ただし、本稿では、応用認知言語学に基づいて分析したネットワーク図式をそのまま教材として学習者に示せば良いと言うことを示唆はしていない。むしろ、教師の側が分析したネットワークに基づいて教授する際のシラバス作りに多いに役立てるべきであるし、また分析に用いた用例やスキーマは、図式を提示するかどうかさておき、学習者に提示することが可能であり、また有効であると考えている。今後、コミュニケーション重視の英語教育において、応用認知言語学が英語教育に生かされ、その学習効果に関する学校現場からの実践報告が待たれている。

＜注＞

1 小稿は2010年札幌大学教友会第27回英語教育研修会において、「英語基本動詞の教育方法論―認知文法・認知意味論による解法―」という演題で講演したものに大幅に加筆・修正を施したものである。

2 著者の一人、田中茂範氏は著書に『認知意味論　英語基本動詞の多義の構造』というものがあることからも明らかなように、認知言語学者の一人である。

3 大西泰斗氏らによるNHK教育TVの番組、2005年放送「ハートで感じる英文法」、2006年「ハートで感じる英文法会話編」や田中茂範氏らによる2006年「新感覚☆キーワードで英会話」、2007年「新感覚☆わかる使える英文法」などがこれに相当する。後にこれらは書籍として出版されている。

4 田中（編）(1987)、田中（1990)、田中（ほか）(2006) 及び佐藤・田中 (2009)、また上野 (2006, 2007) はそうした教材の分析方法を論じた数少ないものである。

5 セッティング (setting) とロケーション (location) は程度の問題であり、前者は出来事が展開する比較的広い空間を表すのに対して、後者はそれよりも狭い空間を示すものと定義される。

6 濱田 (2011) では認知能力とその反映としての捉え方による文法現象を詳細に説明しているので参照されたい。

7 ここでの性質はあくまでも著者の主観であることをお断りしておく。またここでの分析は古典的意味論のチェック・リストのような印象を受けるが、あくまでも便宜上のものである。実際には、個々の成分要素には還元できないようなゲシュタルト的意味を含みながら、ダイナミックなカテゴリー形成が成されている。

8 メタファーとメトニミーによる拡張は先に見たドメインとも関連している。メタファーはドメイン間の類似性に基づく拡張である。具体的には、具体的なドメインと抽象的なドメインがある場合、そこに類似性が見いだされ、抽象ドメインを具体ドメインに見立てて理解する。換言すれば、具体ドメイン

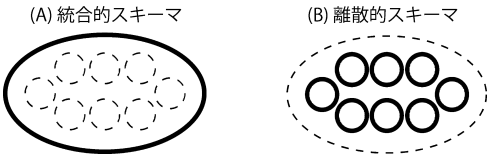
から抽象ドメインへシフトすることでプロファイルされる実体が例えられるということになる。他方、メトニミーによる拡張は同一ドメイン内での近接性から生じるため、そのドメイン内でのプロファイルの実体と実際に示されているものとの間に乖離があることから生じるものである。

9 ただし、ドメインの「形（shape）」を失えば同時に「機能（function）」も失うことに繋がってくる。これは一種の近接性に基づくメトニミーによりもたらさせられる概念であり、これらを完全に切り離すことはできないと考えられる。以下の議論でも同様である。

10 理論的に精密化するためには、本来は「意図性」ドメインをネットワークに反映させなければならないが、煩雑さを避けるためにここでは省略している。

11 注の 9 を参照のこと

12 拡張例［g］はプロトタイプと一見すると相似しているように思われるが、プロトタイプでは、分離後の個々性が捉えられるのに対して、拡張例［g］ではそのような個々性よりも容器としての全体性が保持され、その内容物の機能が損なわれることを含意しており、違いがある。これは山梨（1995）が言う「統合的スキーマ」と「離散的スキーマ」の関係と相似している。



（山梨 1995：127）

図 A ：統合的スキーマと離散的スキーマ

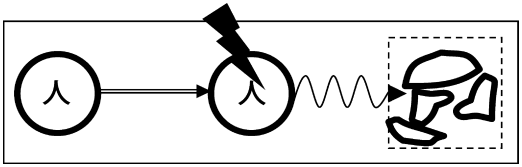
13 本来この拡張には拡張例［c］→［d］→［e］の拡張順のように、［f］と［i］の間にはもう一つの接点となるクッションがなければならない。つまり、拡張例［d］のようにランドマークが非人間化のメタファーにより拡張し、人そのものを示す指示対象をとるものである。

(i) I broke him.　（私は彼をだめにしてしまった。）

(ii) 拡張例：拡張例［f］からのメタファーによる拡張（ lm の具体物→人間）

「人が人に力を加え感情を損なわせる」

中心となるドメイン：トラジェクター：「能力」；ランドマーク：「感情」



図Ｂ：拡張例

しかしながら、こうした用例は著者が調べた限りにおいて、言語分析用コーパス等では見受けられるものの、学習英和辞典・英英辞典では見受けられなかった。従って、英語教育を考える本稿ではこの事例を除外している。

14 ドメインの階層性については Langacker (1987, 2008) や Croft (1993) を参照されたい。また、濱田 (2010) はドメインの観点から数多くの言語現象を観察し、その有用性を考察している。

15 このネットワークでは、本来は図13の［ペット］のネットワークで見たように、個々の拡張例同士からスキーマが抽象化 (abstraction) されて抽出されるはずであるが、図の煩雑性を避けるため、それらを省略している。よってこの図では最も上位のスキーマとしての「スーパースキーマ (super schema)」だけを記述している。また、精緻化 (elaboration) の関係の表示も最小限にとどめている。

＜参考文献＞

Croft, William. 1993. “The role of domains in the interpretation of metaphors and metonymy.” *Cognitive Linguistics* 4. 335-370.

濱田英人．2010.「言語の意味と認知ドメイン」『文化と言語』札幌大学外国語学部紀要．第50号．65-99.

濱田英人．2011.「言語と認知－日英語話者の出来事認識の違いと言語表現－」『函館英語文学』第72号．43-68.

Kaniza, Gaetano. 1979. *Organization in Vision.* New York: Praeger Publishers.

Koffka, Kurt. 1935. *Principles of Gestalt Psychology.* New York: Harcourt, Brace and Company.

小西友七．1980.『英語基本動詞辞典』東京：研究社.

Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By.* Chicago: The University of Chicago Press.

Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, vol.1: Theoretical Description.* Stanford: Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar.* Berlin /New York: Mouton de Gruyter.

Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar, vol.2: Descriptive Application.* Stanford: Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. 1999. *Grammar and Conceptualization.* Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction.* Oxford: Oxford University Press.

佐藤芳明・田中茂範．2009.『レキシカル・グラマーへの招待』東京：開拓社.

田中茂範（編）．1987.『基本動詞の意味論』東京：三友社出版.

田中茂範．1990.『認知意味論』東京：三友社出版.

田中茂範・佐藤芳明・阿部一．2006.『英語の感覚が身につく実践的指導』東京：大修館書店.

田中茂範・川出才記．2010.『動詞がわかれば英語がわかる』改訂新版．東京：ジャパンタイムス.

谷口一美．2006.『学びのエクササイズ 認知言語学』東京：ひつじ書房.

Taylor, John R. 2002. *Cognitive Grammar.* Oxford: Oxford University Press.

上野義和．2007.『英語教育における理論と実践－認知言語学の導入とその有用性－』東京：英宝社.

上野義和（ほか）．2006.『英語教師のための効果的語彙指導法－認知言語学的アプローチ－』東京：英宝社.

山梨正明．1995.『認知文法論』東京：ひつじ書房.

＜検定教科書＞

平成22年度版．*New Horizon English Course 2*．東京：東京書籍.
平成22年度版．*PRO-VISION ENGLISH COURSE I. New Edition*．東京：桐原書店.
平成22年度版．*PRO-VISION ENGLISH COURSE II. New Edition*．東京：桐原書店.

＜辞書＞

Cambridge Advanced Leaner's Dictionary. 3rd ed.（CALD3）
Collins COBUILD English Dictionary. 5th ed.（COBUILD5）
Collins COBUILD English Wordbank（Wordbank）
『E-DIC』第2版．東京：朝日出版社.（E-DIC2）
『Ｅゲイト英和辞典』（田中茂範・武田修一・川出才紀(編)．）東京：ベネッセコーポレーション.
Longman Dictionary of Contemporary English 5th ed.（LDOCE5）
Macmillan English Dictionary for Advanced Leaners 2nd ed.（MED2）
Oxford Advanced Learner's Dictionary. 8th ed.（OALD8）
Oxford English Dictionary. 2nd ed.（OED2）